ザリガニの赤ちゃんと共に育つ

阿部　康子

新しい園生活が始まり少しの不安と期待に目を輝かせた子ども達で賑わった四月から、園庭の若葉がまぶしくなる五月半ば、どの保育室にもお玉じゃくしや蛙、めだか等の小さな生き物が子どもと一緒にやってきます。

「せんせい、これ」と差し出す容器の中にお玉じゃくしがいっぱい、「あら、お玉じゃくし、どこにいたの」「おばあちゃんの田んぼにいた」「そう、ありがとう、皆のお友だちだね」そんな会話が交わされ、保育室やテラスに様々な生き物の水そうが並びます。手で掻き回し捕えようとする子、それを止めようとする子、ひたすら見つめてその場を動かない子、いろいろな表情が集まって賑わう一つの場となっていきます。

そんなある日我がクラスにも待望のザリガニがじゅんちゃんのバケツに入ってやってきたのです。

中には赤黒い斑点に大きな二本のはさみを振りかざしたザリガニが四匹もいたのです。早速じゅんちゃんの手からバケツを受け取った新任のS先生、「大きなザリガニだね」と驚きながら少し戸惑った表情。それでも「早く広いところに入れてあげようよ」と子どもにせかされてザリガニの家作りが始まりました。飼育図鑑を頼りにベビーバスと水そうの底に洗った砂と小石を敷き園庭の池から汲んだ水を張って、どうやら家ができ、ザリガニは二匹ずつ分けられて新しい暮らしが始まったのです。

次の朝、一匹のザリガニのはさみがちぎれており元気がないのに気がついたS先生と子ども。ケンカしてやられたのかな、お腹が空いてケンカをしたのかもしれない、等と話し合ううちS先生は再び子どもと図鑑を広げてケンカをさせない為に一匹ずつ隠れる場所を作ることにし、「昨日作ってあげればよかったね、ごめんね」と反省しながら子どもが探してきた割れた植木鉢を入れました。その二日後、はさみをなくしたザリガニは死んでいました。S先生は「煮干しもきちんとあげたのに……」としょんぼりして登園する子どもを迎えたのです。

残りの三匹が死なない為にはどうしたらよいか子どもとS先生は真剣に考えた末、毎日水を替える、えさの煮干しを細かくしてやることにし、子どもとS先生の日課となりました。それでも三匹のザリガニは次々と死に一か月半後、じゅんちゃんと一緒にやってきた四匹のザリガニは全部死んでしまいました。S先生は勿論、じゅんちゃんを始め毎日世話をしてきた子どもたちには大きなショックでした。

その後しばらくの間は「じゅんちゃんのザリガニ大きかったよね」「こわくてつかまえれんかった」な

ど話題にのぼったが、夏を迎えた園庭はプールで戯れる子どもの歓声、くま蟬の鳴き声、しゃぼん玉飛ばしや泥んこに夢中の子ども達で賑わうようになり、赤黒いからだに赤い斑点、二本の大きなはさみを振りかざしてやってきた四匹のザリガニとの生活は終わっていました。

一学期を終えて、反省の中で

保育という子どもとの営みの中で大きな意味を持つ一学期の反省は様々な視点、角度から保育者の在り様をあぶり出していく作業になります。その一つの視点にお玉じゃくしやだんご虫、蛙、かたつむり等の子どもの身近に生息する小さな生き物との出会いがあります。保育の中でその出会いをどのように用意したか、どう出会わせたか、子どもにとって出会った体験は何であったか、その子にとってどのような意味を持ったのであろうか、その時保育者はどうであったか等が話しあわれたのです。

M先生は四歳児のだんご虫探しの行動から……。I先生は子どもと見たかたつむりの産卵の姿を中心に。A先生は子どもと一緒に世話をしていた兎が六月のある日死んだこと。兎が死んだと騒ぐ子どもたちに、五歳児でもあることから死んだ兎をタオルで包み一人一人に抱かせたこと、そしたら子どもは「冷たい」「かたくなっている」と誰もが神妙な表情でつぶやきながら抱いていたこと、死という厳粛な事実がどれ程子どもに伝わったか分からないが死との出会いも大切にしたいという思いを語ったのです。

――S先生の反省

私はこの園にきて初めていろいろな生き物と出会い、飼育するという事にぶつかって戸惑うばかりで子どもに教えて貰って終わってしまいました。兎の死に出会った時もA先生のような思いは考えてもみませんでした。私のザリガニが何故短期間に死んでしまったのか、エサは煮干し以外のものも考えてみ

るべきでした。水そうの水替えも毎日するのが適していたか、水草や藻を与えることに何故気付かなかったかと今思うと残念でなりません。今後は一つ一つのことにじっくりと向き合っていきたいと思います、と反省しきりでした。

S先生とザリガニ

そしてS先生には保育者二度目の年が始まったのです。私はY先生が丹念にザリガニを飼育してようやくお母さんザリガニから離れた子どもザリガニがいることを知って、その子どもザリガニを育てることをすすめました。S先生はY先生から六匹の小さなザリガニを受け取り育て始めました。

ザリガニの家づくりに変化が出た

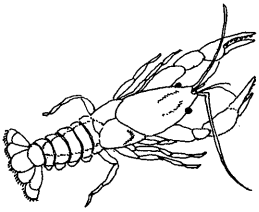
水そうに敷く川砂と小石の層が昨年の倍程の厚さになり、石や、ほど良く割れた植木鉢が置かれ前日から汲み置いた水をたっぷりと張り、Y先生の助言も得て水そういっぱいに水草、藻を入れザリガニの子どもが安心して過ごせるものにできあがりました。

新鮮な水草、藻を求めて

「田んぼの水路を見つけると車を降りて、水草は生えていないか、藻はどうかと探すうち恰好の場所を見つけました。明日子どもと一緒に水そうの水替えをします」とバケツいっぱいの水草を持参して嬉しそうに話す姿は生き生きとして、ザリガニの飼育を楽しんでいる気持ちが率直に出ていて私にとっても嬉しいものでした。

ザリガニが脱皮したよ

ある朝、出勤したS先生はザリガニの脱皮を見つけてすごく感動した様子で「ザリガニの脱皮って大変なんですね、とても疲れているみたいです。今日はそっと休ませてあげるように、子どもに話します」と話してく



れました。その後もザリガニの子どもたちは何回も脱皮を繰り返して次第に大きく成長していきました。

水草採りの中で沢山のザリガニに出会う

何時もの水路に水草採りに行ったら自分の育てているのと同じ位のザリガニがいっぱいいるのに出会って、あんまり可愛いのでクラスの子どもたちにも出会わせたいと思って連れてきてしまいました、といたずらっ子のような笑顔で見せてくれました。そしてS先生の発見！「何時も水が流れていて、美味しい水草のいっぱいある所がザリガニは好きなんですね、自然に近い状態で飼育するのは難しいけれど子どもと一緒に頑張ってみます」でした。

今年の反省会でのS先生

ザリガニの子どもが何回も無事に脱皮して良い成長をしていること。水替えは二日に一回位が適当であるらしいこと。エサは煮干しより水草やちくわ、じゃこが良いらしいこと。更に何時も気を配っていることが大切だということ。そして何よりも保育者の思い入れが子どもにより多くの興味を呼ぶように思いました、とS先生は語ってくれたのでした。

十月現在、Y先生から貰い受けた六匹のザリガニの子どもは大きく成長して心地良い三箇の水そうの水草の中から元気な姿を見せています。しかし運動会等の行事で十分な世話ができずにいるとたちまちザリガニに異変が起こります。慌てて水や水草を取り替えてホッとしたり、忙しい中で日照に気を配る等のS先生の細やかな心使いが目にとまるようになりました。S先生の成長も先輩保育者や子どもたち、ザリガニと共にあったように思うこの頃です。

（愛知双葉幼稚園）